Y6-28

専門看護師・認定看護師が行う中堅看護師に対する専門領域研修（現況報告）

広島赤十字・原爆病院　総合相談支援センター
○札埜　和美、神垣　町枝、田村　直美、玉置由紀子、山水有紀子、井上　智子、松本　典子、森兼久美子、塞本智津美、山野　千夏、松本小百合、小川　葉子

【はじめに】当院は地域の中核病院として,幅広く,高度で専門的な知識・技術を有する看護師が求められている。医療が複雑化,多様化するにつれ,さらに,充実した質の高い看護実践能力が必要とされているが,当院において体系的・系統的に専門的知識・技術を学べる機会は少ない。そこで,院内において,専門看護師・認定看護師が中心となり,「専門コース研修」の企画・運営を実施した。
【専門コースの概要】目的：専門的知識や技術の習得・看護の専門性を発揮し,リーダーシップが果たせる看護師を育成する。研修対象者：経験年数5年目以上もしくはラダー2相当の看護師。研修内容：平成22年度は「がん看護」「急性期看護」「領域別看護（ストーマ・スキンケア,感染管理,腎不全看護）」の3コース,各全6回とした。平成23年度は「緩和ケア」「がん化学療法」「急性期看護」「ストーマ・スキンケア」「腎不全看護」の5コースと分野を拡大した。講師は,専門看護師および認定看護師,院内登録看護師が担った。結果：受講者述べ人数は,平成22年度は93名,23年度は262名であった。受講者の背景は経験年数10年目未満の参加が多く,年齢は20歳代が多かった。
【考察】受講者数は平成22年度と比較し,23年度は2.8倍増であったが,院内に占める受講者数は約7%と少ない。受講者へのアンケートの結果,全員が他のスタッフへ受講を勧めたいと回答しており,研修内容の満足度は高いことが推測される。　今後の課題として,研修時間,開催回数,広報の仕方などについて検討を加え,受講者数の増員および受講者のニーズに対応できる研修内容および専門コース研修の成果指標の検討が必要と考える。

Y6-29

国際医療救援部研修修了者の現状分析～国際派遣の経験から～

名古屋第二赤十字病院　国際医療救援部
○伊藤　明子、高橋　奈美、川崎登茂子、杉本　憲治

【はじめに】当院では2007年から国際医療救援部研修生(看護職)を設立し、院内外における臨床看護研修及び国際関連研修を通して、国際医療救援・開発協力要員に必要な能力の向上を目的に人材育成を行っている。研修制度開始後5年が経過し、研修応募者は総数30名(当院12名,他赤十字病院8名,赤十字以外10名)であり、内14名が研修制度を利用している。国際派遣を経験した研修修了者の現状を分析したので報告する。
【方法】対象：2007年度～2011年度に研修を修了し派遣経験をもつ看護職7名に対して自由式調査を用いた調査。データの集計：調査紙の結果を単純集計し自由記載は要約する。
【倫理的配慮】研究計画書及び質問紙は調査前に倫理審査を受け、調査の同意は調査紙の回答をもって同意とする。
【結果】研修生が研修した主な部署は産科・小児科は7名、外科6名、救急外来5名、整形外科4名であり、また2名は他施設での研修も実施した。語学力は6名が何等かの研修を受講しており、平均TOEICは受講前530、受講後830であった。自由式回答では、多部署を短期間にローテートする研修により、多岐にわたる看護実践の知識・技術の習得、幅広い対象の理解、異なる環境への適応、目標管理等の能力を培い、それが国際派遣の現場で役立ったという回答があった。英文抄読会、Project Cycle Management、危機管理、救援部内での業務なども派遣に役立ったと回答があった。また、補足すべき点は、地域保健医療における社会調査法の知識と経験、地域看護研修、予算管理等であった。
【まとめ】国際派遣を経験した研修修了者への調査により、研修内容は派遣活動に活用されていることがわかったが、開発事業に関する施設外での地域研修等を取り入れる必要がある。今後は赤十字施設のネットワークをいかし、効果的な研修先を検討する。

Y6-30

国際救援・開発協力派遣希望者への支援取り組みの評価

福岡赤十字病院　看護部
○橋本　香織、西野　美紀、江田　柳子

A病院では平成18年度より国際派遣を希望する看護職員を中心に教育及びシステム作りに取り組み、支援を行ってきた。平成19年には、PCM手法を用いて関係者で派遣支援の為の5つのアプローチを導き出し、これまで運営してきた。今回、これまでの取り組みの評価をPCM手法により行い、今後の支援についての方針を導き出したので、その結果を報告する。平成19年にPCM手法により導き出された5つのアプローチは、１）希望者リストアップアプローチ、２）ラダーリンクアプローチ、３）広報アプローチ、４）活動報告アプローチ、５）赤十字概論アプローチであった。これまでの支援は看護部を中心に取り組んでおり、研修プログラムを立ち上げて運営を行ってきた。また、平成21年度からは九州ブロック内の施設へも参加を呼びかけ、他施設からの参加者も含めて研修を行っている。今回の評価では、希望者リストアップ、広報、活動報告のアプローチが有効であったという結果を得た。A病院では、平成16年度から毎年国際活動へ職員を派遣している。派遣希望者への支援が引き続き行えるよう、今後は、看護職以外の他職種を含めた派遣希望者への支援の拡大、赤十字研修を全職員へ実施することによる病院全体の風土改善など、全職種を対象とした支援になることが望ましいことが示唆された。そのため、さらに病院全体での取り組みになるよう調整を行うこととなった。

Y6-31

２年生の成人看護学実習のシャドー実習における学生の思いと学び

富山赤十字看護専門学校
○布川佳要子、山本　朋子

2年生の成人看護学実習のシャドー実習における学生の思いと学びを明らかにするために、A看護専門学校の2年生と3年生7名を対象に、質的記述的研究を行った。　学生の思いについては44コード、15サブカテゴリー、5カテゴリーが、学生の学びについては21コード、8サブカテゴリー、４カテゴリーが生成された。　以下、カテゴリーを【　】、サブカテゴリーを＜　＞として表す。　学生は、＜実習は大変で不安＞＜記録が大変＞＜早い時期のシャドー実習は負担＞と感じ【余裕がないと取り組めない】現状である。シャドー実習の説明は受けていても＜イメージがつかない＞ために＜何をどこまでするかわからない＞＜患者に負担＞と【シャドー実習にともなう不安】がある。また目的をどのように＜スタッフへ説明＞するか＜入るタイミング＞にも【戸惑い】がある。【スタッフの言動で委縮】する内容には＜する意味を問われる＞＜実施を求められる＞＜自分の評価が下がる＞があった。一方、実施後は【スタッフと話しやすくなった】とも思っている。シャドー実習の在り方については、＜事前に何ができるか情報が欲しい＞、＜タイムリーな説明が効果的＞、＜受け持ち患者と関連させたシャドー実習は効果的＞であり、【実習中の自分に役立つとよい】と思っている。　学びについては＜学習不足の自分に気づく＞＜予習しないと学習効果がない＞ことから【事前学習が大事と気づく】。また、＜看護師間の情報共有の意味が伝わる＞経験や＜看護師の信念に触れる＞経験から【看護師の行動の意味がわかる】。そして【仕事のイメージが具体化】し＜根拠と個別性に基づいた色々な援助方法が分る＞だけでなく＜色々な経験ができてよかった＞と思い、＜受け持ち患者以外にも関心を持つ＞ようになり【看護の視野が広がる】学びを得ていた。